

## 『史記』 屈原列伝の史料的人格について

一一一

大澤直人

## はじめに

戦国史研究において戦国秦を中心とする傾向は、史料制約によるところが非常に大きい。戦国期を記述するものとして『戦国策』や『史記』をあげることができるが、これらの文献には紀年の不明な記事が多く、年代に混乱があるという欠点を抱えている<sup>①</sup>。特に『戦国策』はもともと縦横家の参考資料として用いられたものであり、後世の仮託と考えられる信頼性の疑わしい記述を含んでいる。

『史記』の戦国期の記述についてはこうした『戦国策』にみえるような戦国故事と秦系の史料である「秦記」をもとに構成されている。『史記』戦国期に関する記述としては、本紀、戦国世家、六国年表、戦国諸列伝があり、戦国世家、六国年表についてはそれぞれ先行研究において司馬遷の興味が秦の統一に重点が置かれ、六国についてはその滅亡原理を明らかにすることにされるとされる<sup>②</sup>。

では一方の列伝については果たしてどのような意図に基づいて編集されたものであったのだろうか。筆者はかつて『史記』春申君列伝を取り上げ、その編集意図について考察し、春申君列伝からは戦国末期の秦と楚の政治状況を対比させようとする司馬遷の編集意図がうかがわれると論じ、列伝の記述の書き換えの可能性について論じたが<sup>③</sup>、他の列伝についてはどうであろうか。

こうした関心のもと、本稿では戦国諸列伝の中でも特に屈原賈生列伝を取り上げ、その史料的人格について考察していくことにする。屈原賈生列伝を取り上げた理由については、論賛において、司馬遷が屈原に対して深い同情の意を示しており<sup>④</sup>、そこに司馬遷の編集意図が強く表現されていると考えたからである。

具体的作業としては、始めに屈原の列伝の構成を整理し、列伝の記述の史料的人格について考察を行う。次に屈原列伝の編集意図を、列伝、楚世家にみえる屈原と上官大夫、令尹子蘭、あるいは屈原と懷王との対比から考えていくことにしたい。

## 第一章 屈原列伝の構成

屈原賈生列伝は屈原と賈生(賈誼)の二人の列伝によって構成されているが、当列伝は太史公自序によると、屈原が諷諫の意を込めて「離騷」を作ったことを評価して列伝を執筆したとされる<sup>⑤</sup>。すなわち、屈原賈生列伝の主題は屈原の顕彰にこそあるといえよう。

そこで初めに屈原列伝の構成について見ていくことにする。彼の列伝の構成は以下のように区分することができよう<sup>⑥</sup>。

〈屈原伝の構成〉

(1) 出自に関する説明

A 屈原者、名平、楚之同姓也。為楚懷王左徒。博聞強志、明於治亂、嫻於辭令。入則與王圖議國事、以出號令。出則接遇賓客、應對諸侯。王甚任之。

B 上官大夫與之同列、爭寵而心害其能。懷王使屈原造為憲令、屈平屬草稿未定。上官大夫見而欲奪之、屈平不與、因讒之曰、王使屈平為令、衆莫不知、每一令出、平伐其功、以為非我莫能為也。王怒而疏屈平。

(2) 離騷制作の経緯と司馬遷による解説評価

C 屈平疾王聽之不聰也、讒諂之蔽明也、邪曲之害公也、方正之不容也、故憂愁幽思而作離騷。離騷者、猶離憂也。

D 夫天者、人之始也。父母者、人之本也。人窮則反本、故勞苦倦極、未嘗不呼天也。疾痛慘怛、未嘗不呼父母也。屈平正道直行、竭忠盡智以事其君、讒人間之、可謂窮矣。信而見疑、忠而被謗、能無怨乎能無怨乎。屈平之作離騷、蓋自怨生也。國風好色而不淫、小雅怨諷而不亂。若離騷者、可謂兼之矣。：推此志也、雖與日月爭光可也。

(3) 屈原が斥けられて後の楚をめぐる国際関係と懷王の死

E 屈平既細、其後秦欲伐齊、齊與楚從親。

F 惠王患之、乃令張儀詳去秦、厚幣委質事楚、曰、：懷王怒、大興師伐秦。秦發兵擊之、大破楚師於丹、淅、斬首八萬、虜楚將屈匄、遂取楚之漢中地。懷王乃悉發國中兵以深入擊秦、戰於藍田。魏聞之、襲楚至鄧。楚兵懼、自秦歸。而齊竟怒不救楚、楚大困。

G 明年、秦割漢中地與楚以和。：是時屈平既疏、不復在位、使於齊、顧反、諫懷王曰、何不殺張儀。懷王悔、追張儀不及。

H 其後諸侯共擊楚、大破之、殺其將唐昧。

(4) 懷王入秦に際しての屈原の態度と頃襄王による追放

I 時秦昭王與楚婚、欲與懷王會。懷王欲行、屈平曰、秦虎狼之國、不可信、不如毋行。懷王稚子子蘭勸王行、奈何絕秦歟。

J 懷王卒行。入武關、秦伏兵絕其後、因留懷王、以求割地。懷王怒、不聽。亡走趙、趙不內。復之秦、竟死於秦而歸葬。

K 長子頃襄王立、以其弟子蘭為令尹。楚人既咎子蘭以勸懷王入秦而不反也。

L 屈平既嫉之、雖放流、睠顧楚國、繫心懷王、不忘欲反、冀幸君之一悟、俗之一改也。

M 人君無愚智賢不肖、莫不欲求忠以自為、舉賢以自佐、然亡國破家相隨屬、而聖君治國累世而不見者、其所謂忠者不忠、而所謂賢者不賢也。懷王以不知忠臣之分、故內惑於鄭袖、外欺於張儀、疏屈平而信上官大夫、令尹子蘭。兵挫地削、亡其六郡、身客死於秦、為天下笑。此不知人之禍也。：王之不明、豈足福哉。

N 令尹子蘭聞之大怒、卒使上官大夫短屈原於頃襄王、頃襄王怒而遷之。

(5) 江浜における漁父との問答

O 屈原至於江浜、被髮行吟沢畔。：寧赴常流而葬乎江魚腹中耳、又安能以皓皓又白而蒙世俗之溫蠖乎。

(6) 懷沙の賦を掲げて汨羅の自沈まで

P 乃作懷沙之賦。其辭曰、

Q 陶陶孟夏兮、草木莽莽。：明以告君子兮、吾將以為類兮。

R 於是懷石遂自投汨羅以死。

(7) 屈原死後の楚辭の後継者

S 屈原既死之後、楚有宋玉、唐勒、景差之徒者、皆好辭而以賦見稱、然皆祖屈原之從容辭令、終莫敢直諫。其後楚日以削、數十年竟為秦

所滅。

T 自屈原沈汨羅後百有余年、漢有賈生、為長沙王太傅、過湘水、投書以弔屈原。

まず列伝の冒頭では彼の出自について説明している。それによれば、彼は名を平と言い、楚の同姓（国君に出自する）屈氏の一員である。懷王の時、左徒の職にあり、「博聞強志、治乱に明るく、辞令に嫺う」ことから、懷王に信任され、「入れば則ち王と国事を図議し、以て号令を出だす。出れば則ち賓客に接遇し、諸侯に應對す。」として内外において活躍したとされる（1—A）。

しかしながら、彼のこうした活躍が同列であった上官大夫に嫉まれるところとなり、ついには彼の讒言によって、懷王から疎まれ次第に退けられるようになる（1—B）<sup>⑦</sup>。

讒言にあつて失脚した屈原は、邪説曲論が国事を阻害して、方正の士が受け入れられないのを無念に思い、離騷の賦をつくつたとされ（2—C）、列伝は司馬遷による離騷評価を載せている（2—D）。

次に列伝では、屈原失脚後の楚をめぐる情勢について説明している。屈原が斥けられて後、楚は張儀の謀によって秦より「商、於之地六百里」の割譲を条件に斉と断交し、秦と結ぼうとした。しかしながらこの約束は守られず、孤立した楚は秦と丹、浙において激突し、「斬首八万、楚將屈匄を虜」とされるほどの大敗を喫し、漢中の地を失つてしまう。翌年、漢中の割譲を条件に秦と和議が成立する。列伝によれば、屈原はこの時斉に使いしており、帰国後、懷王に対して張儀の殺害を進言している。さらに列伝は「其の後諸侯共に楚を撃ち、大いに之を破り、其の將唐昧を殺す。」として懷王二十八年（前301）の重丘での敗戦を載せており、屈原失脚後の楚の著しい勢力の後退を記述している（3—E、F、G、

H）。

つづいて懷王入秦時の「秦、虎狼の国にして、信ずべからず、行く母きに如かず。」とする懷王の武関の会に反対する屈原の諫言を載せる。屈原が諫言するも懷王は末子である子蘭の勧めによって入秦し、結局、秦によって拘留されてしまう。（4—J）。

秦による懷王拘留を受けて、楚は懷王の子である太子横を立てて（頃襄王）、この非常事態に対処する。頃襄王は弟の子蘭を令尹に任命するが、彼こそ懷王に入秦を勧めた人物であった（4—K）。屈原は早くから子蘭を憎んでおり、屈原が自らを憎んでいると知った子蘭は大いに怒り、彼の意を受けた上官大夫の讒言によって頃襄王からも遠ざけられ江南の地に流されることになった（4—N）。

次に列伝は、江浜における屈原と漁父との問答を載せ、「舉世混濁なるも我独り清む、衆人皆酔いて我独り醒む、是を以て放た見む。」と屈原は自らの追放を嘆いている（5—O）。さらに懷沙の賦を掲げて、ついには「石を懷き遂に自ら汨羅に投じて以て死す。」と彼の汨羅の自沈までの経緯を記している（6—P、Q、R）。

以降、宋玉、唐勒、景差等の彼の後継者について触れるが、彼らは皆「屈原の従容辞令」を真似するだけで、誰一人として「敢て直諫する」者がいなかったため、「其後楚日以て削られ、数十年にして竟に秦の滅ぼす所と為る。」として楚は滅亡することになったとする（7—S）。そして屈原に続く者として、賈生（賈誼）の名を挙げて、以降賈生の列伝に繋げる（7—T）。

以上が、屈原列伝の構成である。一見して分かるように、懷王の信任厚く国内外において活躍したとされる割には列伝において彼の事績に関する記述は少ない。また、列伝は屈原活動時期における国際情勢について記しているが、列伝を見る限りでは紀年を記しておらず、いつの出来

事であるか判断しにくいという特徴を持っていることが確認できる。次章では、こうした列伝の構成を踏まえて屈原列伝の記述に分析を加えていくことにする。

## 第二章 屈原列伝の分析

前章では屈原列伝の構成について見てきたが、ここでは更に列伝の記述に分析を加えていくことにする。屈原の事績を記述したものとしては『史記』の他に『新序』節士篇があげられるが、両者の記述は大きく異なるものではない。

初めに注目されるのは、彼の出自に関する記述であろう。屈原は左徒として、懐王期において活躍したとされるが（I—A）、果たして左徒なる官職はいかなるものであったのであろうか。錢大昕は春申君黄歇の事例を挙げ、彼が左徒より令尹に就任していることから左徒を貴臣であるとしているが、『史記正義』（唐、張守節）は左徒を「蓋し今の左右拾遺の類なり。」と説明しているように、『史記正義』の段階では既に分からなかったようで、左徒がどのような官職であったのかははっきりしない。そもそも列伝において屈原の事績として確認しうるのは、懐王十八年（前311）の齊へ使者として赴いた事例<sup>⑩</sup>だけであり、列伝に見える彼の事績は極めて少ないことから、ここからは左徒がいかなる官職であったのかは分からない。

前述のように『史記』において左徒に任命された人物は屈原の他に頃襄王期の黄歇の名を見ることが出来る。彼は考烈王によって令尹に任命されるまでは左徒の職にあった。<sup>⑪</sup>黄歇は弁説の才を買われて秦への使者となり、後には質として赴く太子完（のちの考烈王）の従者として共に秦に赴いている。楚世家によれば、少なくとも黄歇はこの時左徒であった

『史記』屈原列伝の史料性格について

ことが確認されるが、彼の登用は「游学博聞」に基づくものであり、秦への使者となったのもその弁説の才によるものであった。<sup>⑫</sup>黄歇の出自について『史記』は明らかにしてはいないが、屈原のように国君の同姓分族であったとは考えにくい。<sup>⑬</sup>彼の登用が「游学博聞」によるものであり、質として太子完と共に入秦していることから考えると、左徒を「左右拾遺」とする『史記正義』の認識も妥当のように思われる。ここで注目すべきは黄歇が左徒職にあった際に太子完の従者として入秦しているという点である。そもそも戦国において他国に質として送られる人物は、

（安釐王）十年、秦太子外、魏に質とし死す。（魏世家）

（安釐王）三十年、無忌魏に帰り、五国の兵を率い秦を攻め、之を河外に敗り、蒙驚を走らす。魏太子増、秦に質たり、秦怒り、魏太子増を囚えんと欲す。（魏世家）

（宣惠王）十九年、大に我を岸門に破る。太子倉、秦に質とし以て和す。（韓世家）

（襄王）十二年、太子嬰死し、公子咎、公子蟣蝨太子為るを争う。時に蟣蝨楚に質たり。（韓世家）

とあるようにその多くが太子であった。また、

（懐王）二十六年、齊、韓、魏楚の其の従親に負いて秦と合う為に、三国共に楚を伐つ。楚太子をして入れて秦に質とし救を請わしむ。（楚世家）

(懐王)二十九年、秦復た楚を攻め、大いに楚を破り、楚軍死者二万、我將軍景欠を殺す。懐王恐れ、乃ち太子をして齊に質と為し以て平を求めしむ。

とあるように、戦国楚においても太子が質となるのは他の諸国と同様であった。以上の事例から考えるに、戦国期には同盟の際の質は太子が務めるのが一般的であり、更には黄歇のように太子に付き添って共に質となった随臣の存在については確認できなかった。また黄歇の場合、その任用が「游学博聞」に基づくもので、その出自が明らかでないことから、黄歇のような随臣が貴臣であったとは考えにくく、入秦の際、黄歇が左徒職であったことを考えると左徒も顯職であったとは考えにくい。そもそも黄歇が考烈王の令尹に任命され、春申君に封君されたのは寧ろ異例のことであり、このことをもって左徒が貴臣であった根拠にはできない。<sup>⑭</sup>

屈原の場合、左徒就任の状況が黄歇の事例と非常に似通っているように思われる。すなわち両者の重用は博識によるものであったという点である。その際、屈原は「治乱に明るく、辞令に嫺う」であったことで懐王の信任を得たとされるが、そもそも「辞令」については、『春秋左氏伝』襄公三十一年に、

公孫揮能く四国の為を知りて、其の大夫の族姓、班位、貴賤、能否を弁じ、又善く辞令を為る。…子産乃ち四国の為を子羽に問ひ、且つ多く辞令を為らしむ。

とあるように、主として対応の言葉を意味した。『史記』においても、

桓公乃ち許し尽く魯の侵地を帰す。既に已に言う、曹沫其の匕首を投げ、壇を下り、北面し羣臣の位に就く、顔色変せず、辞令故の如し。(刺客列伝)

と、ここでも対応の言葉の意で「辞令」が用いられている。そうになると、屈原は治乱の理に明るく対応の言葉に詳しかったために、懐王に重用されたということになる。実際、屈原は辞令に詳しかったために、「出れば則ち賓客に接遇し、諸侯に应对す。」として齊へ使っているのである。一方で列伝は「入れば則ち王と国事を図議し、以て号令を出だす。」とするが、では「以て号令を出だす」とは具体的に何を意味するものであったのだろうか。

『史記』における「号令」の用例を見ると、

莊王位に即くこと三年、号令出さず、日夜樂を為し、令して国中に曰く、敢えて諫むる者有らば死して赦す無し。(楚世家)

句踐と深謀すること二十余年、竟に呉を滅ぼし、会稽の恥に報ゆ。北のかた兵を淮に渡し以て齊、晋に臨み、中国に号令す。以て周室を尊び、句踐以て覇たり。(越王句踐世家)

夫れ燕、秦俱に齊に事わば、則ち大王天下に号令し、敢て聴かざるは莫し。(蘇秦列伝)

とあるように、命令を出すの意で使われている。その上で「入れば則ち王と国事を図議し、以て号令を出だす。」を考えると、「以出号令」の主体はあくまで屈原であり、懐王と共に執政をしたと理解できる。しか

しながら、先に挙げた「号令」の事例の主体が国君であるように、屈原が「号令」したとする列伝の記述は甚だ奇異に感じられる。そもそも懐王期の政権にあつては昭、景、屈三氏の所謂国君に出自する同姓分族（戦国世族）が重きをなしていたが、その中でも昭氏が首位を占めていたと考えられており、令尹職についても主に昭氏が就任していた<sup>⑤</sup>。これらの点を考慮するならば、実際に屈原が左徒として政権の一員であつたとしても、彼が主体となつて政権運営をおこなつていたとする列伝の「入れば則ち王と国事を図議し、以て号令を出だす。」とする記述はその史料的信息性について些か疑問を持たざるを得ないと言えよう。

(1—B)は憲令をめぐつての上官大夫との確執を述べる。屈原は懐王の命を受けて憲令の作成を命じられたが、これを欲した上官大夫の讒言を受けて懐王より遠ざけられることになつたとするものである。この故事については先行する『戦国策』等の説話故事にも見えず、司馬遷が独自に収集した『史記』独自の故事といえる。

(3—E、F)は張儀による謀によつて楚が斉と断交し、秦と和するまでの出来事を述べる。この故事については楚世家に同じ内容を見ることができ<sup>⑥</sup>。列伝の記述は楚世家の懐王十七(前312)―十八年(前311)の記述を簡潔にしたもので、基本的に両者の記述に差異は認められない。懐王十八年に屈原が斉に使用したことは楚世家にも見ることができ、彼の事績として確認することができる。また彼の事績として列伝は張儀殺害を進言しており、このことは楚世家によつても確認することができる(3—G)。

更に「其の後諸侯共に楚を撃ち、大いに之を破り、其の将唐昧を殺す。」として懐王二十八年(前301)の秦、斉、韓、魏連合軍に対する敗戦を載せ、後文に懐王入秦の記事を繋げている(3—H)。列伝の記述では懐王二十八年の敗戦と懐王入秦との間に特に関係性は認められず、そもそ

も紀年がないために個々独立した記述のように思われる。楚世家によれば懐王二十八年(前301)の敗戦は前年の「秦大夫私に楚太子横と闘う有り、楚太子之を殺し亡げ帰る。」をうけてのことであり、二十八年の敗戦以降も、二十九年には「秦復た楚を攻め、大いに楚を破り、楚軍死者二万、我將軍景欠を殺す。」、また翌三十年には「秦復た楚を伐ち、八城を取る。」と連年にわたつて楚は秦に敗戦していることがわかる。その結果として懐王三十年に懐王入秦に至るのである。列伝はこうした経過をわずかに懐王二十八年の敗戦を記すにとどめているために、懐王入秦に至る過程が不明瞭になつているのであるが、これはそもそも列伝自体が屈原の事績を顕彰することが目的であり、入秦に際しての屈原の諫言こそが重要であつたからであると考えられる。

(4—I)は懐王入秦に際しての屈原の諫言を述べているが、列伝と楚世家では発言者の名前が異なる。列伝が、

屈平曰く、秦、虎狼の国、信ずべからず、行く母きに如ず。懐王稚子子蘭、王に行を勧めるに、奈何ぞ秦の欲を絶たん。

とするのに対して、楚世家は、

昭睢曰く、王行く母かれ、兵を発して自ら守るのみ。秦虎狼なれば、信ずべからず、諸侯を并せるの心有り。懐王子子蘭、王に行を勧め、曰く、奈何ぞ秦の驩心を絶たん。

と昭睢の発言とする点において両者は異なる。この相違について『史記索隱』(唐、司馬貞)は「按ずるに楚世家昭睢に此の言有り。蓋し二人同じく王を諫む、故に彼此各随つて之を録するなり。」と注している。確か

に、両者が諫言した可能性も考えられなくもないが、秦を「虎狼」と称し信ずるべきではないとしたこと、更に懐王の公子である子蘭が秦の歡心を買うために入秦を勧めたことなどほぼ同様の記述を載せており、仮に両者が諫言したとしてもこのように発言が一致するとは考えにくい。

楚世家によれば昭雎は懐王期にあつて有力な人物であつたようで、懐王に進言して親齊策をとらせており、懐王が秦に拘留された際には、當時齊の人質であつた太子横を帰国させて頃襄王として即位させている<sup>⑧</sup>。そのため昭雎が懐王の入秦を諫めたことは信賴に足る記述であると思われる。では一方の屈原の場合はどうかであろうか。そもそも列伝では頃襄王即位後の記述に「雖放流」(4—L)とあり、この記述に従えば懐王入秦時、屈原は楚都には居なかつたと考えられる。従つて、懐王入秦時に諫言したのはやはり昭雎とすべきであろう。

また、列伝は「(懐王) 竟に秦に死して帰葬せらる」に続けて「長子頃襄王立ち、弟子蘭を以て令尹と為す。」とあり、懐王が死して後に頃襄王が即位したかのように記しているが、楚世家によると「頃襄王三年、懐王秦に卒し、秦其の喪を楚に帰す」として、懐王の死を頃襄王三年の記述に繋げており、頃襄王は懐王が秦によつて拘留された段階で、既に即位していた。史実については楚世家の述べる通りであるが、列伝は先に懐王入秦に関する一連の経過を記してから、頃襄王の即位を述べたためにこうした記述になつたものと考えられる。

(4—M) では、懐王が賢人を任用せず、讒言を信じ、国を傾けさせたことに対する司馬遷の痛烈な批判を載せる。その中で「人君愚智賢不肖と無く、忠を求め以て自らの為にし、賢を挙げ以て自らを佐るを欲せざる莫し、然るに国を亡し家を破る相い随い属す、聖君国を治る累世にて見ざる者は、其の所謂忠なる者は不忠にして、所謂賢なる者は不賢なり。」とする司馬遷の君主論を展開し、懐王と屈原、上官大夫及び子蘭の評価

を下している。彼の君主論に基づく評価については次章にゆずることにして、ここでは紹介だけに留めておくことにする。

(4—N) 頃襄王即位後、屈原は新たに令尹となつた子蘭の命を受けた上官大夫の讒言によつて、再び遠ざけられることになる<sup>⑨</sup>。

(5—O) は「漁父」における江浜における漁父との問答を引用し、屈原の故事と繋げている。この時、漁父が屈原に対して「子非三閭大夫歟。何故而至此。」と尋ねており、このことから屈原は三閭大夫なる職についていたとされる。三閭大夫について王逸は「離騷序」の中で「三閭の職、王族三姓、曰く昭、屈、景を掌り、其の譜属を序し、其の賢良を率い、以て国士厲す。」と説明している。しかし、三閭大夫については屈原以外に他に事例が無く、どのような職であつたのかについては不明である。竹内貞夫によれば漁父篇自体がそもそも屈原と漁父との問答に託して、後人が屈原の人物性を巧みに表現した作品とされ、そこに当時の楚の状況がどれほど反映されているかについては不明であるとしている<sup>⑩</sup>。従つて屈原が三閭大夫であつたとする事績における歴史的信頼性は疑わしいと考えられる。

(6—P、Q、R) では懐沙の賦を掲げて、屈原の心情を描写し、汨羅の自沈までを記している。

最後に屈原死後、楚辞の後継者について触れており(7—S)、宋玉、唐勒、景差の名前を挙げるが、いずれも彼の言葉を真似るだけであつて、王を諫めることはなかつたとしている。彼らの作品については『漢書』芸文志にそれぞれ「唐勒賦四篇」、「宋玉賦十六篇」を載せており、司馬遷自身もそれらの作品を自ら読むことでこうした感想を抱いたものと考えられる。結局、列伝は屈原の後継者について触れるが、いずれも彼の真の後継者たりえなかつた。しかし「屈原汨羅に沈みて自り後百有余年」、賈生の登場をもつて列伝は屈原の後継者の出現とするのである(7—

T)。

以上、屈原列伝における彼の事績をみると、事績の基準となる紀年記事は極めて少なく、紀年記事についてもほぼ対秦関連の記事に限られている。また列伝を構成する故事は彼の三つの作品に関する故事を中心に配列されているが、列伝を歴史的な事績としてみると、懐王期の左徒就任、懐王十八年の斉への使者をのぞいて、その年代的な背景は不明であることが分かる。従って一部の戦国故事をのぞけば、歴史的な信頼性が疑われる資料を含むことが指摘できる。屈原列伝については、彼の作品に関する故事を中心に、そうした故事を関連する紀年記事に繋げること時代的背景を付与するよう構成されていると思われる。<sup>22)</sup>

屈原賈生列伝は上述のように、「屈原汨羅に沈みて自り後百有余年、漢に賈生有り、長沙王太傅と為り、湘水を過ぎ、書を投じて以て屈原を弔う。」と賈生(賈誼)の列伝を繋げている。賈誼は漢文帝期の人物であり、屈原と百年以上の時間的間隔があるが、両者が一つの列伝に纏められているのは、両者の境遇の類似性に拠るものである。そこで屈原列伝編纂の意図を探るために両者の類似性について確認することにしてみたい。

まず、類似性を説明する前に列伝から彼の経歴をおつてみると、

- (1) 漢文帝時、最年少の博士として信任され、のち太中大夫に抜擢される
- (2) 諸々の制度・儀礼の改革を提案
- (3) 讒言によって長沙王の太傅に左遷され、赴任途中に「弔屈原賦」を作る
- (4) 長沙王の太傅として三年、自らの境遇を嘆き、「服鳥賦」を作る
- (5) のち召され梁懐王の太傅となるも、懐王の死に対する自責の念から憤死

という流れで構成されている。ここより屈原との類似点について考えてみると、両者とも国君に信任された点、国政に関与した点、讒言により遠ざけられた点、自らの境遇を嘆き作品を作った点などが挙げられる。以上のように両者の境遇の類似点が見出されるが、一方で司馬遷は列伝の論贊において、

賈生之を弔ふを見るに及び、又怪しむ屈原彼の其の材を以て諸侯に遊ばば、何れの国か容れざらん、而るに自らはくの若くならしめしを。服鳥の賦を読むに、死生を同じくし、去就を軽んぜり。又爽然として自失す。

として、賈誼の「弔屈原賦」を評価する一方で、「服鳥賦」を死と生を同一視し去就を軽く見ているものとして評価していない点は注目される。列伝は屈原の後継者として宋玉、唐勒、景差の名前を挙げ、彼らはいずれも「従容辞令」を真似るだけで屈原の真の後継者たりえなかったとして、屈原伝に賈誼の列伝を繋げて彼を屈原の後継者と位置付けている。しかしながら、論贊が必ずしも「服鳥賦」を評価していないのは、結局のところ司馬遷は賈誼もまた屈原の後継者たりえなかったと考えていたからであろう。太史公自序に見える「退きて深く惟い曰く、夫れ詩書隠約なる者、其の志の思を遂げんと欲するなり。……詩三百篇、大抵賢聖発憤の作す所為なり。此人皆意鬱結する所有るも、其の道を通ずるを得ざるなり。故に往事を述べ、来者を思う。」として、『史記』を編集したとする司馬遷の態度からは、或いは屈原の心情を理解しようるのは自分だけであるとする彼の自負を感じることもできるかもしれない。

そもそも太史公自序において列伝編集の動機を「辞を作りて以て諷諫し、類を連ねて以て義を争うは、離騷之有り。」とするように、離騷が

「諷諫」「争義」の作品であることを評価している。司馬遷は列伝論贊の中で「弔屈原賦」を見た際に「又怪しむ屈原彼の其の材を以て諸侯に游ばば、何れの国か容れざらん、而るに自ら是くの若くならしめしを。」と感想を述べているが、これは賈生の「九州を睥りて其の君を相けん、何ぞ必ずしも此の都をのみ懐はん」を踏まえたものである。屈原の去就に対する賈生の評価は、長沙王の太傅に左遷される自分の姿を表現したものと見える。そうした点において賈生は宋玉、唐勒、景差のような「屈原の従容辞令」を真似するだけではない屈原の後継者であると司馬遷は評価したと考えられる。しかしながら賈生が「服鳥賦」の中で去就を軽んじていることを見た司馬遷は結局彼もまた真の後継者たりえなかつたと思つたのであろう。屈原伝に賈生の伝が付されたのも屈原の「去就」と賈生の「去就」を対比させることで、効果的に屈原の評価を示そうとしたためであつたのではないだろうか。

### 第三章 屈原列伝の史料的性格

これまで屈原列伝の構成を検討し、その構成材料の性格について論じてきた。それでは屈原列伝の故事選択の基準はどのようなものであり、司馬遷の編集意図とはどのようなものであろうか。

屈原列伝執筆の動機について、太史公自序を再度引くと、

辞を作し以て諷諫し、類を連ね以て義を争うは、離騷之有り。

とあるように、司馬遷は屈原が諷諫の意を込めて離騷を作つたことを評価して列伝を作成したとする。

また屈原列伝における論贊をみると、

余、離騷、天問、招魂、哀郢を読み、其の志を悲しむ。長沙に適き、屈原の自ら沈みし所の淵を觀、未だ嘗て涕を垂れて其の人と為りを想見せずんばあらず。

とあるように、司馬遷は彼の作品を読み、自ら屈原の自沈した場所に赴くことよって彼の志を悲しんだとある。屈原列伝において選択されている彼の故事もこうした意図に基づいたものとして理解することができ。例えば、屈原が懷王によつて遠ざけられた際に、離騷を作つたとする故事や、漁父との問答の故事、さらに懷沙の賦を作り汨羅での自沈の故事などは屈原のような直諫の士の性格を表すものとして適当な故事であつたということができよう。更に注目すべきは、司馬遷は屈原列伝において自らの君主論を展開していることである。前述のように屈原列伝には司馬遷の君主論が載せられているが、列伝は更に続けて、

懷王忠臣の分を知らざるを以て、故に内は鄭袖に惑い、外は張儀に欺かれ、屈平を疏め上官大夫、令尹子蘭を信ず。兵挫け地削られ、其の六郡を亡い、身は秦に客死し、天下の笑いと為る。此れ人を知らざるの禍なり。

として懷王の人を見る目を批判し、屈原を疎んじ上官大夫や令尹子蘭を信じた結果、秦によつて領土を奪われ、懷王自身は秦地で客死することになったとする。ここには忠臣である屈原を上官大夫や子蘭といった不忠の臣と対比させ、懷王が忠臣を遠ざける結果、楚は衰退していくといふ司馬遷の認識をみることができ。こうした認識は列伝のみならず、楚世家においても同様であつたと思われる。太史公自序には楚世家の執筆意図を次のように説明している。

重黎之を業とし、呉回之を接し、殷の季世、粥子之を牒す。周、熊繹を用い、熊渠是れに続く。莊王の賢、乃ち陳を復国し、既に鄭伯を救し、華元より班師す。懷王客死し、蘭、屈原を咎め、諛を好み讒を信じ、楚、秦に并さる。莊王の義を嘉して、楚世家第十を作る。

とあるように、莊王の義を顕彰して楚世家を作ったとあるが、一方で楚の衰退の原因を子蘭が屈原を誘り、王が讒言を信じたことに求めている。このように司馬遷は屈原を忠臣として考えているが、彼のような直諫の士は懷王のような「忠臣の分を知らざる」国君のもとでは遠ざけられる結果になる。列伝は太史公自序が記すような「辞を作し以て諷諫し、類を連ね以て義を争う」とする彼の人為りを彼の故事を配列することで示そうとしたのである。

いま一つ注目されるのは、司馬遷の戦国楚における懷王期の認識である。楚世家において懷王に関する故事は他の国君と比較すると最も多く配列されており、またそれらの故事は全体として秦に攻撃されるまでの経過を示す内容となつていとされる。楚人にとって懷王は特別な存在であつたようで、懷王が秦によつて拘留され、客死したのを知つた楚人は「皆之を憐み、親戚を悲しむが如し。」(楚世家)とあるように、懷王の死に対して同情的であつた。このことは後に秦末漢初の反乱時、「乃ち楚懷王の孫心を民間に求めるに、人の為に羊を牧するを、立てて以て楚懷王と為し、民の望む所に従うなり。」(項羽本紀)として項梁は懷王の孫を義帝に据えることで、楚の人心を掌握しようとしたことから、楚人の懷王に対する思い入れの強さを知ることができる。司馬遷は懷王期を戦国楚において衰退へと向かう一つの画期として捉えており、楚世家の論贊においても、こうした認識から懷王に対して低い評価を与えている。その一方で遠ざけられながらも「辞を作し以て諷諫し」しようとした屈

原を高く評価しており、屈原列伝においてはこうした司馬遷の評価が色濃く表れており、列伝はこうした評価に基づいて屈原に関する資料を選択・配列したと言えよう。

そもそも屈原列伝は楚辞中より三つの作品、即ち「離騷」、「漁父」、「懷沙」を用いて、これを配列することで、屈原の人物を浮き彫りにしようと思図したものであつた。しかしながら楚辞の作品はその制作時期を明確に示しているものは少ない。列伝に引用された作品中、制作時期の最も明らかに分かるものは「懷沙」であつて、死を決意しつつ沅湘の間を歩む姿が描かれている。そのためこれを列伝の最後に配列することで、汨羅の自沈を導いたのである。また「漁父」篇は屈原と漁夫との問答によつて屈原の人物を巧みに表現し、これを頃襄王期の追放時に配列することで、司馬遷の君主論に基づく、屈原と子蘭との対比を強調する効果があつたと考えられる。論者は先に春申君列伝の編集意図について考察し、そこには春申君列伝と呂不韋列伝とを比較し、戦国秦、楚を対比させる効果があつたと結論づけたが、屈原列伝にもこうした対比をみるこゝとが出来よう。

「離騷」は屈原の代表作であり、壮年の作であることがほぼ確かであるから、列伝の始めに配列したのであろう。この三篇は屈原列伝中において彼の人物を表現するのに巧みに配列され、効果を發揮しているといえよう。

### おわりに

今回は『史記』屈原列伝の構成を考察することで、その史料性格について論じた。屈原列伝は、戦国秦紀年記事と楚辞中における三作品を二大構成材料として、構成されたと想定される。従つて秦紀年にもとづ

く外交的事績については正しく位置づけることができるが、内政面における事績については、主に楚辞によるものであり、歴史的信頼性という点においては再検討される必要があることが分かる。列伝の構成分析から得られた結論は、事件的な事績こそが、歴史的に信頼できる部分であり、三作品に基づく屈原の事績については歴史的に信頼性の疑わしい部分であるということが明らかとなった。

屈原列伝がこのような構成をもつにいたったのは、司馬遷の編集意図にもとづくものであり、資料的制約によるものであった。屈原列伝はその人物の特徴的な性格となる記事を選び、司馬遷自身の境遇と重ね合わせることで屈原の事績を描こうとしたものと考えられる。

屈原列伝の場合、太史公自序にあるように、彼の不遇の中で離騷を作った事を評価し、顕彰することが目的であり、そうした彼の事績は宮刑に処されながらも『史記』を執筆した自らの姿に重ね合わせて屈原を認識している。そのため、すなわち讒言によって追放され、世を侮みつつ自死することになったとする彼の不遇を描くために楚辞等の作品を配列したと考えられる。従って、屈原列伝には司馬遷の君主論に見られる司馬遷の哲学を読み取ることは可能であるが、屈原の事績については歴史的信頼性は疑わしいと言わざるを得ない。しかしながら、歴史的には信頼性の疑わしい屈原の作品や故事説話を配列することで列伝を構成したという所に屈原に対する司馬遷の思いを見ることができるのである。例えば、同じ楚人であっても春申君の場合、「初め、春申君の秦昭王を説き、及び身を出だし楚太子を遣り帰す、何ぞ智の明なるかな。」（春申君列伝論賛）と評価する一方で、しかしながら続けて「後李園に制せらるるは、旄なればなり。語に曰く、当に断ずべくして断ぜざれば、反つて其の乱を受く。春申君朱英の謂を失するや。」として後にはその終わりを全うしなかったことを「旄」として否定的に捉える評価を下しており、屈原の場

合とは評価が異なっている。これは両者の執筆時期が宮刑を受ける前後であったとする時代的相違によるものであることは注意すべきであるが、列伝の場合、人物の事績を記述するという性格から編者の評価というのが色濃く反映されると思われる。『史記』諸列伝においてもそれは言えることであるが、特に戦国期の列伝（非秦系列伝）はその絶対的な資料の不足から司馬遷の評価に基づく資料の選択・配列の傾向を見ることができ、そこに司馬遷の戦国期に対する認識を探ることが出来ると思われる。このように本稿では、『史記』屈原列伝の考察をすすめてきたが、こうした作業はあくまで戦国史研究の前提としての史料批判に過ぎない。近年は豊富な出土資料の発見によって、戦国史研究は少しずつではあるが明らかになりつつある。しかしながら、戦国期については『史記』のような文献資料の存在も無視できず、戦国史研究をより充実したものとするためには『史記』の戦国期部分の史料批判を行う必要があると考えている。

## 注

- ① 春秋、戦国間の史料の欠如については、顧炎武『日知録』卷十三、周末風俗が既に『春秋左氏伝』の終わりから戦国中期の各国称王と蘇秦合縱までの間に、「史文」が欠けていることを指摘している。
- ② 六国年表については伊藤徳男「『史記』十表について（その二）——その構成と意義——」（『東北学院大学論集 歴史学、地理学』22、1990年。後『史記十表に見る司馬遷の歴史観』（平河出版社、1994年）に収録）、また世家については伊藤徳男「『史記』世家の構成」（『東北大学教養部紀要』19、1974年）、藤田勝久「『史記』楚世家の史料の考察」（『愛媛大学教養部紀要』26、1993年。後『史記戦国史料の研究』（東京大学出版会、1997年）に収録）。
- ③ 大澤直人「『史記』春申君列伝に関する考察——その編集意図を探る」（『立命館史学』30、2009年）

④ 司馬遷は太史公自序のなかで、「七年而太史公遭李陵之禍、幽於縲紲。乃喟然而歎曰、是余之罪也夫。是余之罪也夫。身毀不用矣。退而深惟曰、夫詩書隱約者、欲遂其志之思也。昔西伯拘羑里、演周易。孔子厄陳蔡、作春秋。屈原放逐、著離騷。左丘失明、厥有國語。孫子臏脚、而論兵法。不韋遷蜀、世伝呂覽。韓非囚秦、說難・孤憤。詩三百篇、大抵賢聖發憤之所為作也。此人皆意有所鬱結、不得通其道也、故述往事、思來者。於是卒述陶唐以來、至于麟止、自黃帝始。」と述べており、李陵を擁護したために宮刑に処された自身の境遇を屈原等に喩えて、『史記』執筆の動機を語っている。

⑤ 「作辭以諷諫、連類以争義、離騷有之。作屈原賈生列伝第二十四。」(太史公自序)

⑥ 版本については、金陵書局本を基とし、滝川亀太郎『史記会注考証』の校勘を参考にしている。

⑦ 『史記正義』は後漢王逸の「離騷序」を引いて上官大夫と靳尚とを「上官靳尚」として同一人物とする注を付すが、梁玉繩の指摘の通り、靳尚は懷王期に既に死んでおり(『戦国策』楚策二、楚王将出張子)、上官大夫を靳尚とするのは誤りである。このことは梁玉繩『史記志疑』卷三十一に詳しい。

⑧ 両者はほぼ同じ話を伝えるが、離騷製作の動機を『史記』は屈原と同列の上官大夫が、憲令草稿の事を讒言し、結果懷王が屈原を疎んじ退けたとするのに対して、『新序』は秦から派遣された張儀の策謀によつて、上官大夫、靳尚、令尹子蘭、司馬子椒、夫人鄭袖が共に屈原を誘つた結果、屈原は外に放たれたとしている点においては記述が異なっている。

⑨ 「黃歇由左徒為令尹、則左徒亦楚之貴臣矣。」(錢大昕『廿二史考異』卷五)

⑩ 列伝が「使於齊、顧反、諫懷王曰、何不殺張儀。懷王悔、追張儀不及。」とする記述は、楚世家においては「十八年、…屈原使從齊來、諫王曰、何不誅張儀。懷王悔、使人追儀、弗及。」として、懷王十八年に繋げている。

⑪ 「秋、頃襄王卒、太子熊元代立、是為考烈王。考烈王以左徒為令尹、封以呉、号春申君。」(楚世家)、「楚頃襄王卒、太子完立、是為考烈王。考烈王元年、以黃歇為相、封為春申君、賜淮北地十二県。」(春申君列伝)

⑫ 「春申君者、楚人也、名歇、姓黃氏。游学博聞、事楚頃襄王。頃襄王以歇為弁、使於秦。」(春申君列伝)

⑬ 『韓非子』第十四姦劫弑臣には「楚莊王之弟春申君有愛妾曰余、春申君之正妻子曰甲。」とあり、ここでは王弟として理解されている。但し莊王(前613―前591)と春申君との間には年代のずれがあり、陳奇猷は莊王が頃襄王の誤りである可能性について指摘しているが(『韓非子新校注』上海古籍出版社、2000年)、公子・公孫が姓を名乗ることは考えにくく、王弟の可能性は低いと思われる。

⑭ 黄歇の場合、春申君に封ぜられた際、淮北の地十二県という広大な封地を与えられている。従来の封君の場合、封地は県レベルか、それ以下が大半であったことを考えると黄歇の場合は特別な事例であり、左徒から令尹就任というのも異例のことであったと考えられる。

⑮ 戦国楚における令尹職については、昭氏が台頭するようになる宣王(前369―前340)期以降、ほぼ昭氏が独占している。例を挙げると、昭奚恤(宣王期)、昭陽(懷王期)、昭魚(懷王期)など。詳しくは拙稿「戦国楚の政權構造―戦国世族を中心に―」(『立命館東洋史学』30、2007年)を参照。

⑯ 張儀の故事については、『戦国策』秦策二、齊助楚攻秦にほぼ同じ故事説話を見ることができ、『戦国策』においては屈原の張儀殺害の進言を載せておらず、これについては何に基づくものであるかは不明である。

⑰ 楚世家によれば、秦昭王より楚懷王に宛てての書簡には「始寡人与王約為弟兄、盟于黄棘、太子為質、至驪也。太子陵殺寡人之重臣、不謝而亡去、寡人誠不勝怒、使兵侵君王之辺。今聞君王乃令太子質於齊以求平。寡人与楚接壤壤界、故為婚姻、所從相親久矣。而今秦楚不驪、則無以令諸侯。寡人願与君王会武関、面相約、結盟而去、寡人之願也。敢以聞下執事。」とあり、懷王二十七年(前299)の楚太子(秦)の秦大夫殺害逃亡に端を発した一連の対秦戦に対して楚が齊と結んだ事を責める内容となっている。この結果として、武関の会が催されるのであつて、列伝の記述だけではそうした経過が省略されているため、不明瞭な記述となっているのである。

⑱ 「懷王二十六年(通行本は二十年とする)、『史記会注考証』に拠つて改める)：…群臣或言和秦、或曰聽齊。昭睢曰、王雖東取地於越、不足以刷

恥。必且取地於秦、而後足以刷恥於諸侯。王不如深善齊、韓以重樛里疾、如是則王得韓、齊之重以求地矣。：於是懷王許之、竟不合秦、而合齊以善韓。」(楚世家)

⑲ 「(懷王二十七年)：昭睢曰、王与太子俱困於諸侯、而今又倍王命而立其庶子、不宜。」乃詐赴於齊、齊潛王謂其相曰、不若留太子以求楚之淮北。相曰、不可、郢中立王、是吾抱空質而行不義於天下也。或曰、不然。郢中立王、因与其新王市曰、予我下東国、吾為王殺太子、不然、将与三国共立之、然則東国必可得矣。齊王卒用其相計而歸楚太子。太子橫至、立為王、是為頃襄王。」(楚世家)

⑳ 「令尹子蘭聞之大怒、卒使上官大夫短屈原於頃襄王、頃襄王怒而遷之。」(屈原列伝)

㉑ 竹内貞夫「史記屈原伝の一節に就いて」(『支那学研究』15、1956年。後『楚辞研究』、風間書房、1978年に収録。)

㉒ 列伝では紀年記事がないため判断できないが、世家、年表と対照させることによってその紀年を知ることができる。列伝のこうした記述のありようは、列伝は個人の事績を顕彰することが目的であり、既に世家、年表等に同一の記事を載せている以上、記述が煩瑣となることを嫌った司馬遷の意図によるものと思われる。

㉓ 司馬遷は旅行によって見聞きした情報を『史記』製作の際に利用しており、屈原列伝も「長沙に適き、屈原の自ら沈みし所の淵を觀、未だ嘗て涕を垂れて其の人と為りを想見せずはあらず。」(太史公自序)とあるように、実際に汨羅に赴いたことが分かる。佐藤武敏は「司馬遷の旅行」(『人文研究』29—4、1977年。後『司馬遷の研究』汲古書院、1997年

に収録)の中で司馬遷の第一回目の大旅行のコースと目的について深く考察しており、それを踏まえて藤田勝久は「司馬遷の旅行と取材」(『愛媛大学文学部論集 人文学科編』8、2000年)において、司馬遷の旅行が『史記』の叙述にどのようなようにあらわれているか明らかにしている。それによれば汨羅に赴いたのは司馬遷が二十歳の時、すなわち第一回目の旅行の際とされる。そうすると、司馬遷は屈原に対して早い段階から同情の意を示していたということになる。

㉔ 藤田勝久「『史記』楚世家の史料的考察」(前掲)によれば、楚世家は、司馬遷によって興亡の原理を明らかにするという意図のもと、諸資料の選択・配列を行っているとしている。懷王期については屈原の諫言を聞かないことから秦に敗北することになり、滅亡への道をたどると位置づけている。しかし、実際には懷王期は一定の王権の伸張が認められ、戦国末期へと続くシステムが整備された時期であり、懷王期を滅亡への契機とする司馬遷の認識とは異なるものであると指摘している。

㉕ 賢臣と佞臣とを対比させることで衰退の原因を説明しているものとしては、他に趙世家が挙げられる。趙世家の論贊には、「太史公曰。吾聞馮王孫曰、趙王遷、其母倡也、嬖於悼襄王。悼襄王廢適子嘉而立遷。遷素無行、信讒、故誅其良將李牧、用郭開。豈不繆哉。秦既虜遷、趙之亡大夫共立嘉為王、王代六歲、秦進兵破嘉、遂滅趙以為郡。」とあり、趙滅国の原因を趙王遷が李牧を誅殺し、郭開を用いたためとしている。これもまた『史記』の対比による論法といえよう。

(本学大学院博士後期課程)